

気仙沼津谷大沢地区レポートその3

9月22日には岩手県立大インターンシップ生が、9月29日～30日にも復興に向けた新しい公共の場づくり協議会気仙沼事務所でボランティア支援とワークショップが行われた。いずれも若い人で一杯、何かをしたいという気持ちは若い人の方が、そういうことはないと思うが熱いことは確か。街づくり拠点として用意した事務所、地元でも活用しておりならし運転は終わった。



本格的に次の段階へ、10月3日に地元と今後に向けた話し合い、これまでの支援の中で

- ①地域づくりの意識と実践力の高さ
 - ②復興に向けての心構えはできている
 - ③2年間でここに戻ってもらう明確の目標を持っている
- などを感じた。協同の意思は熱く固い。

私たち協議会は覚悟を共有し地域に寄り添いながら何ができるのであろうか、話し合う場の提供から復興に向けた支援をということで話し合った。

安全・安心な基盤づくりもそうだが、住まいと生活の糧、コミュニティが大事と考える。

色々話す中で、これまでの歴史をよみがえらすことはできないであろうか、失われたものを・・・、敗戦後の復興の第一歩と言える「塩たき」、塩たき釜を作り24時間かけて製塩、大人も子供も、塩釜で煮るジャガイモはほどよい塩味で唯一のおやつ、たき口の火の明かりで勉強と聞く、何やら復興のシンボリックな存在になるのかもしれない。

早い時期に復興のための協議会の立ち上げを、そのために私たちの体制整理を急がなければならない。とういうのはグラウンドワーク全体での動きがあるからである。

10月5日、支援活動調整会議が開催された。

GW寒河江を柱に、GW西神楽、GW阪神、GW福岡、GW協会、印旛・手賀沼あっぴ協議会の面々が集まって、それぞれ得意分野で津谷大沢区が求めることを・・・。現状分析の後、各団体から何ができるのかのプレゼン、復興との関わり度に違いがあるが組み合わせることでの相乗効果は期待できる。だが、優先順序があることから交通整理とスケジュール管理は必要、様々な提案が出るがさらに話し合うことを確認して10月29日一関での全国大会へ。



地元とは10月15日、22日と仮称復興協議会立ち上げに向けての話し合いが続く。